



NPO 法人 京都観光文化を考える会
都草だより

第55号
発行人：小松香織
編集人：西野嘉一
発行所：京都市上京区
下立売通新町西入
京都府庁旧本館2階
電話：075-451-8146

.....全国誌に連載始まる.....

■「京都 ふしぎの玉手箱」(『月刊京都』) 連載開始に当たって



昨年秋に白川書院より『月刊京都』への2ページの連載担当依頼がありました。「京都御苑さんぽ」の連載と重なる時期でもありましたが、内容は普通の社寺の観光ガイドのような記事ではなく、角度を変えた目先の違った京都の紹介です。その内容から「わくわく倶楽部」のテーマが一番合っているのではないかという事で、わくわく倶楽部のメンバーが中心となり、『月刊京都』プロジェクト(略称：GKP)を立ち上げました。何にでも興味を示し、「わくわくする事」「ドヤと思う事」「なんでー」とか、「昔はどうだったかな」など何が飛び出すか判らない玉手箱をイメージし、タイトルは、「京都 ふしぎの玉手箱」といたしました。

連載第1回目の7月号は、定番の祇園祭のため祇園祭研究会の協力を得、8月号の五山の送り火の「妙法」では地元の会員を中心に編集に取り掛かりました。同じようなタイトルでも、やはり都草独自の味を盛り込んだ内容に仕上がったと自負しております。

『月刊京都』は全国誌であり都草の活動が全国に紹介されますので、都草の総意を込めて作り上げ、長く連載できたらと思います。個人の名前は出ませんが、皆様の身近のネタや部会の資料の提供・協力はもとより、感想もどしどしGKPまでお寄せ下さいますようお願いいたします。

「京都 ふしぎの玉手箱」主幹 熊谷 喜輝

■京都高齢者大学校「ぶらり京都のまちあるき」を担当して

昨年初めて京都高齢者大学校「ぶらり京都のまちあるき」のガイドに応募して、4月に御所南、5月に2度、東福寺の案内をさせていただきました。事前に数回の下見兼打ち合わせも行いました。先輩方のアドバイスや資料のご提示もあって、なんとか無事に終えることができたかなと感謝しております。

初めての御所南の案内は、勝手がわからず戸惑うばかりでしたが、参加された皆さんの自己紹介をうかがったり京都高齢者大学校のスタッフの方々とは話をするなかで、徐々に緊張も解けていきました。参加される方々の多くは京都以外から来られていました。遠方から来られ、楽しそうにされている皆さんの様子を見るにつけても、内容のあるガイドをしなければと気持ちを引き締めました。

5月の東福寺は、2度とも気温の高い一日でしたが、できるだけ日陰でのご案内やゆっくりとしたペースで歩くように心掛けました。臥雲橋や通天橋から見る青もみじも涼しげで美しく、皆さんも喜ばれているようにお見受けしました。

京都高齢者大学校のガイドは、下調べなどの準備がもちろん大変ですが、大阪など遠くから参加して下さる皆さんのその高い知的好奇心や探求心に接するにつけても、私たちが大いに刺激される魅力のある活動と感じています。(理事 植山 政雄)



■ 京都府立京都学・歴彩館府民協働連続講座 都草講演会



第4回都草講演会は、今回より一般の人も対象にして行ないました。これは都草が「京都学・歴彩館府民協働連続講座プロジェクトチーム」の一員として参加することになったからです。この講座の趣旨は、京都に関わる研究や、京都で活動を行う市民団体等に対して活動成果の発信の場を提供することです。一般府民への公開を通じて京都学の普及促進をはかり、あわせて幅広いジャンルの講座を開講することで、新たな来館者や交流の場を創出するというものです。

6月22日、京都府立京都学・歴彩館の大ホールで都草主催の講演会が開催されました。第1部は「信長と京都 宿所の変遷からみる」と題して、奈良大学文学部史学科教授河内将芳先生の講演。第2部は「信長からみた戦国期の京都」と題して河内将芳先生と明智光秀に詳しい大山崎町歴史資料館館長 福島克彦先生との対談をお願いいたしました。信長と光秀には皆様の関心も高く、都草と歴彩館との共催で広く聴講者を募ることができました。今回は253名

(内91名は都草会員)に聴講していただきました。

歴彩館大ホールでの講演会準備は、初めてのことばかりで手間取りましたが、多くの都草会員の協力を得て無事に講演会を終えることができ、嬉しく思います。次回、11月17日に同じく歴彩館大ホールで第5回都草講演会を予定していますので、引き続きよろしく願いいたします。(理事 岸本 幸子)

■ 第28回文化交流部会 「リュートの演奏と講演会を楽しみましょう」



6月22日(土)に第28回文化交流部会を18名の参加を得て開催いたしました。今回は京都コンサートホールのエントランスホールで開催された珍しい楽器リュートの演奏を楽しみました。その後はフレンチをいただき、都草講演会へと続く盛り沢山な内容です。

リュートは、古代ペルシャ時代に中央アジアで弾かれていた「バルバット」と呼ばれる楽器がルーツではといわれています。それがシルクロードを経て日本の琵琶となり、一方は

イベリア半島を経てリュートになりました。特徴は、ギターよりも弦の本数が多く、多いものでは24本もあります。この日の奏者は世界で活躍する高木一郎氏で、素晴らしい演奏に酔いしれました。柔らかい音色は野山にそっと吹き抜けるそよ風によって綿帽子がふわり、ふわりと飛んでいく光景のような、なつかしさと心地よい旋律に心が和むひと時でした。その昔エリザベス女王1世は眠れぬ夜はお抱えのリュート奏者の音色を聴きながら眠りにつかれたそうです。

そんな音色の余韻を感じながら、近くの開晴亭でフレンチをいただき、しばしの間会員交流の時を過ごしました。今回はなんとも忙しいスケジュールで、食事の後はガラリと場面が変わり都草講演会に参加です。

信長は京都をたびたび訪れていますが、秀吉や家康のように拠点造りをするのではなくお寺を転々として宿所とした事や、信長は教養をもった人物であったのではないかと興味深いお話をお聞きし、中身の濃い一日となりました。(理事 藤井 久美子)

